キズナエピソード

雪舟エリザ　4話

//とびお自室

//ヴィジュアルノベル形式開始

「もしもし。とびおかしら？

どこにいるの？　すぐ来なさい。

今、論文コンテストに出す論文を執筆してるの」

その日も相変わらず、エリザの急な呼び出しで始まった。

「そうか、それは大変だな」

「そうよ、大変なの。急にパソコンが壊れたんだもの」

……面倒事に巻き込まれる予感がした。

//次ページ

「可及的速やかに、パーツが必要になったのよ。

　とびお。急いで買ってきてくれないかしら？」

「そんなの、お前んちの執事に頼めばいいんじゃ？」

「爺にそんなのわかると思うの？

　ボルトとナットを買ってこられるのがオチだわ。

　それじゃ、よろしく頼んだわよ」

「――おい？　エリザ？　おーい？　くそ、切りやがった！」

//次ページ

お礼とか謝罪とか、まずは言うべきものがあるだろうが

ため息をついた瞬間、メールを受信した。

なるほど、あいつは意地っ張りだから、

言葉ではなくメールで伝えようというのか。

そう思って、内容を確認してみたが……。

「このメール、お使いのリストじゃねーか！

　しかもお菓子も含まれてるし！

　あいつ、俺のことをなんだと思ってるんだ……！」

♪♪♪

と思っていたらエリザから電話がかかってきた。

「おい―」

「とびお！まだなの？

もう家は出たんでしょうね？まさかまだ出てないの？

早くしてくれないと困るわ、光陰矢の如しって言うのよ。

しっかりね！」

――――

一方的に早口でまくし立てられて、電話は切れた。

「……つうか、」

こんな時だけ日本語を間違えてないっぽいところが

一番腹立たしかった。

//暗転

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//エリザの家・外観

［とびお］

「結局、買ってきてしまった……」

［とびお］

なんだかんだでアイツの世話を焼いちまうから

いいように使われるんだろうなぁ。

自嘲の笑みをこぼしつつ、インターホンを鳴らす。

［とびお］

すると、エリザの家の執事が応対してくれた。

恭しい挨拶の後で、エリザの部屋へと案内される。

//エリザの部屋

［とびお］

「おーいエリザ　言われたの、買ってきたぞ？」

［とびお］

一声かけて入っていくと、

エリザは広い床一面に紙を広げ、

文字や図を書き連ねていた。

［とびお］

こんな真剣な様子のエリザは今まで見たことがなかった。

なんだか、新鮮な気持ちになる。

［エリザ］

「ここ、置いとくぞ」

［エリザ］

「ありがとう。助かるわ」

［とびお］

……会話はそれだけだった。

物足りなさは感じるものの、

珍しいものが見れたことを収穫に、俺は帰ることにする。

［とびお］

「かかった費用は、あとでもらうからな」

［とびお］

エリザは「ん」とだけ返してくれた。

//暗転

//カフェ・店内

［とびお］

しばらくして、コンテストの結果が出た。

エリザは見事に入賞していた。

俺は祝いの言葉を送ろうと、渋谷でエリザと落ち合った。

［とびお］

「エリザおめでとう！

すごいな。さすがはエリザチャンサマ」

［とびお］

軽口を混じえつつ褒めそやしたのだが、

エリザの口から出てきたのは意外な反応だった。

［エリザ］

「……納得いかない。

屈辱だわ！

あなた、コンテストの優秀賞は見たのかしら？」

［とびお］

「優秀賞？

いや、見てなかったけど。どれどれ……？

って、東山陽彩!?」

［エリザ］

「そうよ。ワタクシは入賞で、あの子は優秀賞。

これを屈辱と言わずに、なんて表現するのかしら？

不名誉？　残念無念？　……つらたん？」

［とびお］

「まぁまぁ、気にするなよ。

メチャクチャ頭のいい人たちが応募した中から

選ばれて入賞したんだろ？　凄いことだよ」

［エリザ］

「そんな箸休めいらないわ！

ワタクシが陽彩の肛門に扮した。

そのことが問題なの！」

［とびお］

「落ち着けって。

あと、気休め、だし、後塵を拝した、だからな

特に後の方は屈辱なんてレベルじゃなくなってるぞ」

［エリザ］

「うるさいうるさい！

そんな些細な事はどうでもいいのよ！

悔しい、悔しい、悔しいーー！！」

［とびお］

「おい、暴れるなよ。まったく……」

［とびお］

エリザは頬を膨らませて、駄々っ子のように腕を振る。

危ないったらありゃしない。

取り押さえようと近づいていった結果――。

(［エリザ］この間にブツブツ言っている「そもそも日本のアカデミズムは～若いハーフの女は迫害されていて～牧瀬クリスだって～…」）

［とびお］

「痛っ！」

［とびお］

エリザの勢いの乗った一撃が俺の顔を直撃した。

見事なグーパンチだった。

鼻の奥から、たらりと血が落ちてくる。

［とびお］

「……おい」

［エリザ］

「あ……。な、なによ。

そんなところに立っているのが悪いんでしょ！

ワタクシは悪くないわ！」

［とびお］

意地を張るエリザに、俺は無言で視線を送る。

彼女は言葉に窮した後、睨み返してきた。

［エリザ］

「ふんっだ！　私は悪くない！

とびおが悪いのよ！

謝ってくるまで、許してあげないんだから！」

［とびお］

それだけ言い残して、エリザは帰っていく。

謝ってくるまで許さない？　それはこっちのセリフだ。

流石に、今回ばかりは頭にくるものがあった。

//ADV形式終了

//4話終了